

国際保健学特別セミナー開催

著者	市村 宏
著者別表示	Ichimura Hiroshi
雑誌名	金沢大学十全医学会雑誌
巻	128
号	2
ページ	52-52
発行年	2019-07
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055880



『学会開催報告』

国際保健学特別セミナー開催

A report of the Global Seminar in Kanazawa

金沢大学医薬保健研究域医学系 ウイルス感染症制御学
市 村 宏

去る2019年6月7日、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院学長、元国連合同エイズ計画 (UNAIDS) 事務局長Peter Piot博士および同大学院人類学教授、ワクチン信頼プロジェクトディレクターHeidi Larson博士 (Piot博士の奥様) を金沢にお迎えし、医学類3年生と若手研究者 (留学生を含む) を対象に国際保健学特別セミナーを開催しました。

Piot博士は、常に活動の拠点をアフリカに置き、近年のアフリカにおいて最も致死率の高い二つの感染症であるヒト免疫不全ウイルス (HIV)/エイズとエボラ出血熱をはじめとして、クラミジア、結核及び淋病を含む、アフリカ大陸の多くの地域に存在する疾病についての中心的な研究を行ってきました。1976年にザイル (現コンゴ民主共和国) でエボラ出血熱を発見したチームの一員であり、アフリカにおける異性間の性交渉によるHIV感染と小児のHIV感染/エイズ、またアフリカにおけるHIV感染と結核との関連の存在を確認した最初のグループの一人でもあります。

Piot博士は、多くの傑出した科学的論文の発表と国際場裡での精力的な役割を通して、HIVの大流行に対する全球的規模での注意と関心を惹起し、HIVの大流行に対する資金調達やコントロールへの国際的な関与を高め、HIVのコントロールと対策に対し科学的に根拠のある対応をしたことで、これまで多くの賞を受賞されており、2013年には第2回野口英世アフリカ賞を受賞されています。

Larson博士は、健康介入政策に影響を与える可能性がある社会的および政治的要因の分析を主な研究テーマとしており、特に、臨床試験から応用までのリスクとデマを管理し、国民の信頼を築くことを目的としています。彼女は以前、UNICEF (国際連合児童基金) のGlobal Immunization Communication (世界予防接種通信) を率い、GAVI (ワクチンと予防接種のための世界同盟) のAdvocacy Task Forceの議長を務め、WHO SAGE (ワクチンと予防接種のためのWHOへの主要な諮問グループ) の反予防接種運動に対する提言をまとめました。現在、FDA (米国食品医薬品局) 医療対策緊急連絡専門家ワーキンググループに参加し、シエラレオネでのエボラワクチン試験の展開、承認および遵守に関するEU基金プロジェクトの主任研究員を務めています。

講演1: 100 years on from the Spanish Flu: Are We Ready for the Next Epidemic? (スペイン風邪の流行から100年—われわれは次の流行への準備ができているのか) — Peter Piot博士

「スペイン風邪」を始めとして、ウエストナイルウイルス (米国: 1万5千人以上の死者)、香港風邪 (70万人以上の死者)、HIV (3,000万人以上の死者)、SARSコロナウイルス (死者774人) など、過去に生じた主要な感染症の流行による世界並びに日本における社会的インパクトから、グローバルリスクは相互に関連していることがまず紹介され、以下のような内容の講演がなされました。

感染症の流行が今後も世界を脅かし続けるであろうということが予想されます。インフルエンザやHIVと同じようにエボラウイルスの感染も、元は動物由来のものであり、今後も未知の動物由来感染症が将来、人類を襲うことも十分に起こり得ます。流行がどこで起きようとも、それはその地方の人々に大きな打撃を与えるだけでなく、米国やスペインにおけるエボラ症例が示すように、何千キロも離れた場所でも感染を引き起こすことになります。極めて致死性の高い病気の輸入感染や二次感染は、流行国以外の国に対しても患者のケアや隔離、臨床的、公衆衛生的な封じ込め対策に大きなコストを強いることになります。また、社会的なパニックや保健システムの崩壊を招くこともあります。したがって、西アフリカのエボラとの闘いは、流行国の人々の苦痛を緩和するだけではなく、世界全体に利益をもたらす「世界共通公共財」と考えるべきです。同じことは他の数多くの感染症対策にも当てはまります。

流行発生の様々なリスクが組み合わせられると、ウイルスの感染を拡大させ「本格的な嵐」を生み出すことになります。内戦、保健システムの機能不全、世界最低水準の人口当たり保健医療従事者数、病気の原因に対する伝統的な迷信、そして国内、国際レベル双方の対応の遅れ、それらが組み合わせられて、エボラ危機という嵐が生み出されました。これらのことはまた、感染症の流行を防ぎ、コントロールする上で、保健システムを適切かつ公正に運営していくことがいかに重要であるかということを示しています。

講演2: The state of vaccine: a global view (ワクチンの現状: 世界的観点から) — Heidi Larson博士

最も有効な感染症予防対策は有効なワクチン接種であることは議論の余地のないところですが、最近、「反ワクチン運動」が世界的に広がりを見せており、無視できない問題となっています。麻疹撲滅宣言を出している欧米諸国 (特にフランス、アメリカ) における最近の麻疹の流行や、フィリピンやインドネシアにおける反デング熱ワクチン運動を例に、科学的なデータに基づいたワクチン接種の有効性・安全性の啓発の重要性が強調されました。

日本においても、子宮頸がんワクチン接種の勧奨中止が継続されたままであり、これらの問題解決の困難さが認識されました。

ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院は、公衆衛生と国際保健の分野で世界を主導しており、この分野を目指す多くの研究者や学生が世界中から集まってきます。今回、ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院のPiot院長先生とLarson教授のご講演を金沢で聴講でき、学生や若手研究者は多いに満足したようでした。また、多くの学生・研究者が両先生との講演後の討議を楽しんでおりました。

